

# 国際交流

平成 9 年 9 月30日創刊

平成25年1月31日発行(第30号)

二松学舎大学国際交流センター(教学課)

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

Tel:03-3261-7406

## ◆目次◆

海外協定校教職員相互訪問制度に基づく北京大学訪問について

文学部 江藤茂博教授 …………… 1

留学生近況報告

大学院文学研究科 博士前期課程1年 楊松児 …………… 2

国際政治経済学部1年 肖竣豊 …………… 2

派遣留学修了報告

文学部4年 吉岡萌(成均館大学校派遣) …………… 3

交換留学修了報告

北京大学 張展 …………… 4

中国文化大学 洪潔欣 …………… 4

中国文化大学 蕭如意 …………… 5

平成24年度 夏期中国語・歴史文化研修の報告 …………… 6

平成24年度 交換留学制度 …………… 7

国際交流センターからのお知らせ …………… 8

国際交流センター実施行事報告

第2回TOEFL-ITP(団体割引でのTOEFL受験)

第9回外国人留学生日本語スピーチコンテスト

国際交流年末懇親会

編集後記

## 平成23年度海外協定校教職員相互訪問制度による北京大学訪問

平成13年度に始まった北京大学歴史学系との海外協定校教職員相互訪問制度は、平成23年度で第10回目を迎えました。今回、本学の派遣教員として文学部の江藤茂博教授が、平成24年3月26日から31日まで6日間を訪問しました。

### 文学部教授 江藤 茂博

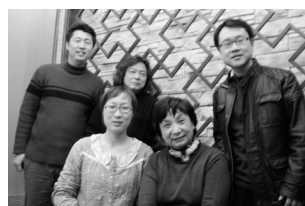
北京大学歴史学系に、ほんのわずかな期間だったが滞在する機会を得た。北京大学の学生数は2万5万人くらいだとすでに聞いていたので、日本の大きな私立大学と同じくらいかとイメージすることができた。学生数が10万人を超える中国の大学を訪問したこともあるし、かつて私が滞在していたアメリカの州立大学もまた学生数が10万人を超えていたので、そこまでは巨大ではないということでもまずは安心したのである。もちろん二松学舎大学とは比べものにならないが、実際、都内の国公立大学のキャンパスと同じくらい広さだったので、キャンパス内外を気ままに散歩できた。

大学キャンパスはやや郊外にあっても、地下鉄の駅がすぐ側にあり、キャンパス周辺の街は深夜まで賑やかだ。もっとも夜になると、かなり暗いキャンパスの中を、守衛らしき検問する者のいる通用口を出入りしなければならない。さらに深夜となると、街に出てもさすがに開いている店は少なく、果物売りの屋台や労働者が食事をしている屋台が若干並んでいるだけである。学生たちは、夜11時くらいにはキャンパス内のアパートに帰るようで、一度などは、混雑の中、学生証の提示を求められた女子学生が検問する男と言い争うのを見かけた。中国語だから、その音声だけで喧嘩のように聞こえたのかもしれない。

そんな中国語を知らない私が、20人ほどを前に講演した。

現代日本の文学とサブカルチャーについてである。通訳の大学院生と打ち合わせをしたうえでの講演だったが、聴衆である若い学生たちは私の日本語を直接理解しているようであった。微妙に私の言葉に反応しているのだ。そして、彼らからのさまざま質問なども、中国の若者の現代日本文化への興味と理解とを含んでいて、楽しい時間を過ごすことができた。そんな機会とともに、担当の大学院生から観光の希望を聞かれ、798芸術区見学と長距離バスの発着駅の周囲散策、日本人は行きたがらないという抗日センター訪問、そして二松学舎らしく孔子廟の観光を希望した。彼は、すでに地方の大学の教師で、学位取得のために北京大学歴史学系の博士課程に在籍しているとのことだった。そんなまじめな大学院生なので抗日センター以外は私が案内することとなった。

一度目はビジネスで、二度目はきままな観光で訪れた北京を、今回は学術的な目的で訪れることができたのはとても嬉しい。帰国の前日には、歴史学系のスタッフにお別れの宴を設定していただき、一週間の旅程を終えた。



北京大学歴史学系の皆様と



798芸術区

## 留学生近況報告

平成24年4月、本学では留学生10名（大学院2名、学部8名）を迎えました。希望を胸に、異国の地である日本、そして二松学舎大学を選び大学生活を送ることになった2名の学生に、近況を語ってもらいました。

### 大学院文学研究科博士前期課程中国学専攻1年 楊 松児



日本へ留学に来てから、もう二年近くが経った。他の留学生たちと比べ、二年という年月は長くない。しかし外国人として、日本で生きていくことの辛さは自分にしかわからない。辛い時もあるし、寂しい時もある。更に言えば絶望的な時もある。もちろん楽しいときもたくさんある。この二年間は、学歴のためというよりも、毎日一生懸命頑張って生きていく人生の成長経験だと思っている。

私の故郷は中国のある小さな町である。その時の私にとって、あの町は世界の全てであった。2006年、18歳の私は北京の大学に進学した。地元を離れ、大都会で生活するのは初めてのことである。この世界は私が以前から想像していたものよりもすばらしいものだ気づいた。北京にいた四年間、私の世界観は徹底的に変わっていった。

大学四年生の時に、初めて留学することを考えた。動機は単純であった。自分がまた若いうちに、他の広い世界をもっと見たい。留学先もすんなりと決まったのは日本に興味を抱いていたからであった。この決意を母に伝えると「行きたいのなら、行きなさい。ただし必ず戻ってくると約束してちょうだい。」と母は認めてくれた。

2010年9月27日、日本に来た。成田空港で日本の空を見て、日本の空気を吸い込んだ時のあの興奮を未だに覚えている。言葉ができなくても大丈夫。きっと順調にいくと思うと同時に、今の自分がドラマの中にいるようだとも思った。初めの頃は新鮮味があるから、何に対しても克服することができた。しかし新鮮さが色褪せ、日本人との交流もうまくできない。何度も実家から送金をしてもらおう。そのような現実的な生活に向き合うと、国内の友人が羨ましく見えてきた。留学しなければわからない淋しさがあつた。しかしながら、私の留学の目的は旅行ではない、進学である。

日本語学校にいる一年半、たくさんの初めてがあつた。初めて外国人の友達ができる、初めて自分でご飯を作る、初めて面接をする、初めてアルバイトをする、初めて一人暮らしをするなど、中国にいた時はできなかったことを今ではできるようになった。これは留学生活の中で得ることができた大きいものだと思う。

日本語がわからずに、聞き取ることも喋ることもできなかった頃に比べると、今では生活にも言葉にも慣れて、上手に話すことはできなくとも、予想の通りのペースで順調に進んできた。

将来は国文教師になる目標を持っているので、大学院と大学の専攻が同じである中国文学に決めた。進学情報を探し、最終的にこの二松学舎大学の中国学専攻を選んだ。しかしながら最初に専攻を選ぶ時に、すごく迷った。中国人が日本で中国学を学ぶことがおかしいと感じていたからである。だが、様々な情報を調べていくうちに、日本の漢文学研究は深い歴史を持ち、更に

は日本独自の特徴と読み下す方法があるということを知った。そして今、前学期を経て、この思いがもっと強くなった。

素晴らしい博学多才な先生たちと周りの先輩たちがいつも私を手伝ってくれる。「ヨウさんの日本語がだんだんと上手になってきた。」という励ましの言葉を頂くと、本当に嬉しい。

興味深い授業や日本語のレジュメの作成を通して、日本語をもっと上達させなければいけないと感じている。そして、教員になるためには知識をもっと豊かにしなければならない。これは今の私の最重要事項である。

私の留学生活はまだ一年半あり、一年半後の私がどんな風になっているのかが楽しみである。帰国する時には、きっと留学前とは全く別人の自分であると思う。



皇居前にて

### 国際政治経済学部1年 肖 竣豊



私は2年前に、留学生として日本の語学学校に入学しました。その時の私は、日本語のコミュニケーションがうまくいかず、いつも人と交流する時は、言葉や文法などを間違えていたので、話がまだ終わらないうちに、周りの人がいなくなることも多かったです。そのため、アルバイト

先では仕事内容をきちんとつかめず、よくからかわれていました。おかげでアルバイト先は長続きせず、探しては2ヶ月で辞めるという状態でした。でも、そのうち、まず、日本語をしっかりとやらないと、この日本で生きられない、日本語をしっかりとやらないと、未来はシャボン玉のように消えてなくなってしまうと気づいたので、進学や日本語の勉強について、いろいろ考えました。

日本語の勉強に対しては「聞く」「しゃべる」「書く」、この3つしかないと思っていました。なぜかというと、私はどの国の人と交流するときでも、まず、他人が言う事を理解してから自分の意見を述べます。そして最後に、綺麗な言葉で述べるのが人と人との言葉のやり取りだと思うからです。だから、日本語をしっかりと聞き取り、上手にしゃべるようになるためには、進学先は絶対に中国人の集まる場所に行かない、でも中国の文化へ関心が高い学校に入ろう、場所は生活が便利な東京、そして未来の夢を実現するためにと考え、二松学舎大学を選び、入学しました。

入学してからは、先生方とまわりの学生のおかげで、全部が予想以上に順調だと思います。友達も出来て、授業もちゃんと聞き取れます。分からないことや知らないことがあったらまわりに聞けば、とても丁寧に教えてもらえるので、うれしいし、楽しいです。ただ、私は春セメスターの履修登録を間違えてしまい、単位が足りず、はじめは少し落ち込んでいました。しかし、時間の流れと

ともに「仕方ない、後で頑張るしかない」と思い、今では張り切っています。まだ入学から現在までそれほど長くはありませんが、やはり大学は楽しいです。

3年前、将来は何になりたいかと聞かれ、私は「あれがいいな、それもいいな」とあれこれあって答えられなかったのですが、あるきっかけで、あるファッションブランドが好きになりました。だんだんと服のデザインも好きになり、ファッションの勉強を始めました。少なくとも今後5年間、中国ではこのファッションブランドは普及しないと分析した私は、今ここで頑張れば、将来自分で会社を

起こせるかもしれないと思いました。夢を持って日本に来て、いろいろ調べたり経験したり、考えたりした結果、はじめはネットショップから始めようと考えています。

大学卒業後は、日本で自分の店を出したいと思います。日本の会社に就職しようと思ったことはありません。私の性格というか、生意気というか、他人にどう言われても、私は私と思っているからです。

今後も大学で学んだことをしっかり身につけて、自分の夢が夢で終わらないよう、努力して実現させたいと思います。

## 派遣留学修了報告

### 韓国・成均館大学校

文学部中国文学科4年 吉岡 萌



今回の留学は、今まで日本にいた時の環境では経験できなかったようなことばかりでした。さまざまなことがありましたが、今回振り返り、感想として大きく三つにまとめて

みました。

一つ目は、海外に観光ではなく生活として滞在したことです。日本にいれば実家に住み、言語の面でもなに不自由なく生活していましたが、韓国での生活は言語が違う環境の中ですべてを自分でこなさなくてはならず、日本では甘えて生活していた私が少し自立し人間としても強くなった気がします。

日本と距離も文化も近い韓国ですが、生活してみて、文化・考え方の違いを感じました。歴史的に複雑な日本と韓国なので、「日本」に対する韓国人の考え方については、悪い考えを持っているのではないかと留学前から少し不安であり、気になっていました。前々から、日本と韓国の間にある問題に関心があり、大学の授業でも関連した授業を受講しました。日本と韓国の問題についての考えは人それぞれだと思いますが、韓国で生活して、占領時代に生きていた方々は日本に対して悪い印象は持っており、そのすぐ下の世代(話、教育で当時のことを知っている方々)のほうが日本人に悪い印象を持っているように感じました。さらにその下の若い世代の方々は、日本に関心、憧れを抱いている方が多かったです。占領当時を生きた方々は、私が日本人と分かるととても親切に助けてくださり、優しく日本人の話もしてくださいました。留学でたくさんの韓国の方と出会い、これからも韓国の方と付き合っていきたいと感じ、前々から関心を持っていた日本と韓国の問題についての正しい知識を、韓国語と並行して勉強していきたいと思いました。

二つ目は、語学力の向上、さらに語学に対する意識、意欲が高まったことがよかったと思います。韓国に留学する前は、教科書の上で勉強してばかりで、韓国の方と韓国語で会話をする機会が多くありませんでした。実際韓国で生活すると毎日が会話練習の機会、みるみる上達していくのを感じました。私の性格としては、机の上で勉強しているよりも実際に行動し試して語学を学ぶスタイルのほうがあっていましたようです。また、留学して世界各国の人とふれあえたこともよかったです。交換留学生として世界のたくさんの国から学生が成均館大学に来ており、さらに語学

堂でも多くの国の様々な世代の人々と出会う機会がありました。日本で生活しているだけではなかなか海外の友達を作る機会はなかったのですが、韓国に留学して外国人の友達がたくさんできました。それによって、英語の必要性をとっても感じました。韓国で留学生の間のコミュニケーションツールは英語だったので英語でうまく話せない私は大変苦労しました。もともと英語は好きで興味もあり、学校で勉強してきましたが話す機会がなく、また話す必要性もなかったのでは忘れていました。これから私がやりたいことを実現するためにも英語は必要だと強く感じました。これから本格的に英語を話せるようになって将来にも生かしたいと考えているので、英語圏への留学も視野に入れていきます(日本で勉強をすることも可能ですが今回の留学で自分にあった勉強法を見つけたので、現地に行ってしまったほうが私には合っていると思います)。

最後の三つ目は、何といっても今後の目標が見つかったことです。もともと中学校のころから言語を学習することが好きで、海外のことに興味を持っていましたが、特に具体的な将来の夢も目標もなくなんとなく生活をしてきました。しかし、今回留学して自分のやりたいことが見つかりました。留学して私自身つらいこともたくさんあり、海外で分からないことばかりの時に、韓国の友人、語学堂の先生方が助けてくださったことがとてもありがたく、私も同じように日本に来ている海外の方を助けられる職業に就きたいと考え始めました。日本にいる外国の方を助ける職業の一つとして、現在は日本語教師になることを考えています。日本語を教える技術はもちろん大切ですが、学習者の母語と日本語の差を理解することも日本語教師として必要だと思うので、今回留学して得た韓国語の知識、今まで学習していた中国語、英語の知識も生かしていければと思います。

今回の留学で就活活動が遅れてしまい、さらに今年から日本語教員養成コースを履修し始めたので、卒業がさらに延びてしまいますが、留学したことは全く後悔していません。むしろ、私の人生においてプラスになったことばかりです。この経験を無駄にしないよう今後の大学生活、人生に生かしていきます。



クラスメイトと

## 交換留学生留学修了報告



### 東洋の共感

中国 北京大学 張 展

初めて二松学舎の名を聞いたとき、何か微妙に親近感が出てきた。資料を捜すと、二松学舎の名は、不変の節操・堅貞を象徴する松樹が庭に二本あったこと、韓愈の『藍田県丞廳壁記』に「對樹二松、日哦其間」とあり、学舎として後の世まで続くことを願って、二松学舎と命名されたこと。藍田県は中国の小さい町の名で、私の出身地なのでびっくりした。何か縁があると確信した。

二松学舎で留学した一年間、授業では中国と関係ある授業がいっぱいで、私は新しい視点で中国を再認識した。もっとも思い出深いのは漢詩の勉強だ。私は漢詩が大好きだが、中国では漢詩を作る人が段々少なくなって、二松学舎で漢詩の作り方を知り、旧友と再会したような感じがした。特に、日本で漢詩を作るルールは今の中国よりもっと厳しいので、いろいろなことを勉強した。二松学舎の漢詩研究会に参加し、深い感触を得た。中国では味わえない漢詩研究に、「さすがは二松」と思った。

漢詩研究会のポスターは、杜甫の画であった。この画は、中国での国文の教科書の中にも掲載されている。最近中国では、この画像に落書きした「杜甫は忙しい」という絵のシリーズがネットで大人気なのだ。ある日、私はある日本の番組を見た。いろいろな国の人を集めて、皆で何かの話題について「私の国なら、なにに」と討論しあう番組である。この日の話題は「教科書の有名人に落書きするか」。中国人代表の人は「私達中国人は有名人を尊敬していて、先生も厳しいので落書きしない。」と言った。ああ、私は学生時代落書きが大好きで、周囲には私のように落書きが好きな問題学生もいっぱいいた。やはり人はいろいろだと思う。「○国の人なら、そうなる」、その考え方はよくないかもしれない。

この一年間、日本列島の壮大な自然美を感じるために、いろんなところへ旅行した。特に印象深いのは、秘境駅と呼ばれるところだ。山の奥や海のそば、駅員もいない小さい駅である。人がいないところだから、自然と親近する。それ以外にも、宿坊や民宿、日本古来の様子を見ると、旅行の楽しさは一層増えていった。一人で普通列車に乗って、ずいぶん暇があるので、いろんなことを考えた。日本は山地の海国



船上からスカイツリーを眺めて

で、どこでも山と海が見える。海を一望し天地に君臨する山は、この風景を昔々からずっとここで、無言で数千万年を送った。この自然の素晴らしさを見ていたら、自分も無口になっていた。

この壮大な自然の前では、どんな地位をもっている人間でも、小さい子になる。山に登るのは山を征服することではない。ただ山は、自分の子を上げて、自分の見た風景を与えた。高い山から見ると、どんな偉い都市でも、おもちゃのようなものになる。

日本の山は、私のふるさとの終南山とよく似ていると思った。これらの山は千年以上の歴史を静かに見ていた。山の下の世界がどんなに変わっても、山は変わらず、ずっと威厳の様子で私達を見ている。この自然と比べると、私達のことはとても小さくなる。

これは、私が好きなゲームの中の言葉だ。この広い世界、長い歴史のなか、私達は水面の小さい木片のように、波に漂流して止まらない。私達の出会いはそれほど珍しくありがたいことである。しかしなぜ皆が別々な立場を作り、その立場によって恨みあい、喧嘩するのか。立場というのは本当に人の感情を超えるものなのか。なぜ更にたくさん立場を作り続けるのだろうか。勝っても負けても、歴史の中の小さい飛沫にすぎない。歴史の波に、段々忘れられていく。

これも、この一年間の感謝を述べたあとに、言いたいことばである。



### 留学を終えて

台湾 中国文化大学 洪 潔欣

来日後、一年になる私は、日本のさまざまなことを体験しました。にぎやかな都市だけではなく、閑静な田舎など、多くのところに行き、鮮明に四季が変わりゆくのを味わいました。秋に入ると、紅葉だけではなく、イチオウやほかの名も知らないさまざまな植物が色を変えて、暖かい色になりました。そして冬になると、木の葉が落ち、さらに寒くなったら白い雪も降ります。春には綺麗な桜といろんな咲き誇る花があって、夏には華やかな花火と祭りがあって、台湾でなかなか見られないことをたくさん体験して、すばらしい経験だったと思います。

日本に来て、自分でも変わったことがありました。その中で一番変化が大きいのは自分のファッションです。台湾にいた時は、周りには大胆な衣装を着る人もいるけれど、極めて少ないです。あまりにも華やかな衣装を着たら、周りの人の視線が必ず迫ってきます。大部分の人が控え目のファッションを身に付けて、コスプレでも特定な場所やイベントでしか見られません。そのことによって私もかなり素朴な服を着ていました。しかし、日本に来てから、日本の若者のファッションを見た後、私もますます憧れ

を持つようになって、「少しでも華やかになりたい」という気持ちが強くなってきました。私は、日本の若者がこのような自分をアピールする独特な衣装を着られる大胆さに感服し、自分も周りの視線を気にせず、ますます華やかな服を着られるようになりました。

日本語の勉強もだいぶ進んできましたが、外国で暮らしていることによって、私は前よりさらに自立できるようになりました。そして物事に対する考え方も変わって、視野も広がりました。日本に来る前、私はこの国に対しての見方は単純な憧れでしたが、今ではさらに多様な見解を持てるようになりました。どの国でもさまざまな事情があって、教科書が教えてくれたこととすべて同じではないと知りました。やはり教科書から得た知識より、



桜の下で

留学するほうが自分の目で確かめたことで衝撃性が伝わります。留学生活を送りながら、台湾と日本の相違点を次々と発見して、想像以上に多く、本当に良い勉強になりました。これから私は、帰国しても日本から学んだことを活用して、学業に役立てようと思います。

## 四季の巡りとともに

台湾 中国文化大学 蕭如意

あっという間に日本での一年間の留学生活は終わりに近づきました。私にとって、日本は二度目の留学ですが、台湾での留学とまだ違った体験でした。日本に留学

することに決めた時、東日本大震災が発生しました。そのため、日本に行くのは大丈夫かと家族が心配していました。しかし、日本は復興が進んでおり、せっかくのチャンスも逃したくないので、日本に来ることを決意しました。やりたいことを負担なくやれるのは学生時代だからこそだと思います。ですから、これからも充実した生活を過ごそうとしました。

日本に来る前に、台湾の大学の先生が「日本の四季の変化を感じなさい」とアドバイスしてくださいました。私は熱帯国に生まれ育ったので、四季という感覚は全くありませんでした。三年間台湾に住んでいたけれど、四季の意識は強くなかったです。しかし、日本に来たおかげで、春に桜、夏に花火、秋に紅葉、冬に雪という素敵な四季を体験することができました。

日本に来たばかりの時は残暑で、とても暑かったですが、その後最初に感じた四季は秋でした。天気が段々涼しくなったり、もみじが赤くなってきたり、イチョウも金色に変わってきたりして、見るだけで気持ち良くなりました。12月には留学生スピーチコンテストがあり、参加させていただきました。恥ずかしい話かもしれないですが、はじめはステージに立つのを怖がって、スピーチをする勇気もなかったです。ですから、この留学生スピーチコンテストは私にとって、自分を乗り越える大挑戦でした。いい勉強になりました。

そして、冬がやって来ました。私は暑がり屋なので、冬を一番楽しみにしていたとも言えるでしょう。今までの人生の中で見たことがなかった雪もはじめて見ました。友人と北海道に旅することもでき、皆もはじめて一面の銀世界の景色が感じられ、興奮してしまいました。また、先生にスキーに誘っていただいて、スキーの初体験ができました。

冬をいっぱい感じながら、暖かくなり、春が来ました。どこでも綺麗な桜が咲いており、周りがピンクの雰囲気になりました。桜は咲き始めから散り始めまでの期間が短いですが、桜吹雪も非常に幻想的で、綺麗でした。一つだけちょっとびっくりしたのは、染井吉野はピンクではないことです。昔から桜というと、ピンクのイメージしか思い出せませんでした。しかし、はじめて染井吉野を見て、白いと気づき、驚きました。桜が散っても、春にも様々な花が楽しめます。花でも初体験でいっぱいでした。見たことのない藤の花、あじさい、あやめなどを満喫しました。

また天気が暑くなり、梅雨明けとともに夏も来ました。四季を感じながら、あ、時間の流れはこんなに早かったのか、と思います。帰国もまもなくのことですが、今まだ日本にいるうちに、最後の留学生活を楽しんで過ごしたいと思います。夏にもたくさん祭りがあり、浴衣を着て花火大会を見に行くのは憧れでした。夢が叶ってとても嬉しいです。



浴衣を着て

この一年間、初体験がいっぱいでした。台湾にいる友だちと一緒に卒業できなくて、謝恩会も行けなければ、そのかわりに日本で初体験をたくさんもらいました。笑ったり泣いたりしましたが、楽しかったです。大学の事務の方と先生にも、お世話になりました。将来は日本で勉強したことを活かされればいいなと思っています。

## 平成24年度 夏期中国語・歴史文化研修の報告

1996年より始まり、今回で16回目を迎えた夏期中国語・歴史文化研修は、平成24年8月9日～29日の3週間の日程で、海外協定校である北京大学歴史学系にて実施しました。今年は20名参加、毎年多くの学生が参加し、中国への短期留学を経験しています。

本研修は、午前中国語授業、午後補講や歴史文化講座を軸としてプログラムを組んでいます。中国語授業は2クラスに分かれて授業を展開しています。毎年本学の中国語授業を担当し、学生の気質を熟知している講師もあり、学生も安心して授業に臨むことが出来ます。授業は毎朝8時から始まるため、7時の朝食を終えると学生たちはすぐに教室に向かいます。

授業等以外では、北京市内や郊外の旧跡名所見学と自由行動時間もプログラムに盛り込んでいます。今回も普通の観光ツアーでは組まれることがない場所にも足を伸ばし、見学に行きました。これも本学の独自プログラムだからこそ、実現できることと言えるでしょう。また、自由行動時間では、学生たちは大学構内はもちろんのこと、市内見学や買い物に出たりして、現地の人と積極的にコミュニケーションを取り、学んだ中国語を使うようにしていました。語学は間違いを恐れては、伸びません。実生活で使いながら覚えるというのも中国に来ているからこそ出来る経験です。

中国の歴史・文化を肌で感じ、現地での生活をとおして、生活習慣に触れるというのは、学生にとっても貴重な異文化体験でもあります。

3週間はあっという間に過ぎていきます。研修に参加する目的の多くは、中国語が話せるようになりたいというのがほとんどです。中国語を毎日使っていると、研修が終わる頃には自然と口から中国語が出るようになり、上達したと実感できます。また、研修が始まった当初は、学部学年もばらばらの知らない者同士が、現地での生活を通して、いつしか仲良くなっていき、困ったことがあれば、互いに助け合い、研修が終わる頃には参加学生全員が仲間となっていきます。短い時間ながらも、学生は中国という国で、勉強のみならず、精神的にも一回りも二回りも成長する姿はとても頼もしいものです。

今年も無事に3週間の研修を終えることが出来ました。引率の先生方をはじめ、協定校の先生方、そして参加学生の皆さんの協力により実現出来たことだと思います。この場を借りて、改めて感謝したいと思います。

毎年、この語学研修がきっかけとなって、参加学生の中から長期留学を目指す学生がいます。期間の長短問わず、留学は決して容易なことではありませんが、来年も多くの学生の参加を期待しています。



中国語授業（林承節先生）



中国語授業（菲先生）



校内にある未名湖



林承節先生を囲んで歴史学系の正門前にて



### 文学部中国文学科2年 喜島 千晴

私は二年生の夏にこの研修に参加しました。この三週間はとても楽しく、またとても充実していて、私にとって忘れられない体験となりました。

この研修へはあまり迷うことなく参加を決めました。やはり行く前には環境や言葉に対する不安がありました。海外へ行くことさえ初めての私にとって、三週間というのはとても長く感じ、本当にやっていけるのか、向こうへ行って何もできなかったらどうしようかなど、いろいろと考えてしまいました。しかし、それと同時に、必ず何かを得て来ようという決意もありました。

中国に着いて、そういった不安はすぐに無くなりました。環境はやはり日本とは違いますが、過ごしづらいということは全くなく、また、自分の学んできた中国語がちゃんと伝わることに感動し、自信をもちました。

授業のクラスは2つに別れていて、私がいたクラスは林承節先生が担当してくださいました。初めは先生の言っている事が聞き取れず戸惑うこともありましたが、先生はとても優しく、私達がわかるまで根気よく教えてくださいましたので、中国語のみでの授業もきちんと理解することができました。

また、私達のクラスでは、毎回授業の始めに一人一人が短いスピーチをして、質問をするという、会話練習をしました。その時に、自分の言いたいことを中国語にして話すという力を伸ばすことができ、それは授業の外でも大いに活かすことができました。

自由行動の時には、主に王府井や前門などで買い物をしました。買い物の時の値段交渉の時、お店の人と話をするのがとても楽しかったです。なぜかその時は



研修に参加した仲間と万里の長城（八達嶺）にて

スムーズに会話が進みました。二回目に王府井に行った時に、前回買い物をしたお店の人が皆私のことを覚えていてくれたことには感激しました。

そうして生の中国を見て、中国人とふれあって、日本にはないおおらかさを感じました。日本人である私たちに気さくに話しかけたり、道ばたで寝そべっていたり、赤信号でも信号を渡ったり、博物館も撮影OKだったり……それが良いことか悪いことかはわかりませんが、私はそのおおらかさに触れて、今まで日本で細かいことを気にしすぎて肩身が狭くなっていたのだと感じ、何か気持ちが少し楽になったように思います。

当たり前が当たり前では無くなったときに気づくことの多さと面白さに溢れた三週間でした。

語学の面でも、自分の中国語が伝わることに自信を持つと同時に、自分の言いたいことがなかなか伝えられない、相手の言っていることが理解できない悔しさを感じました。せっかく気さくに話しかけてくれても、言っていることがわからず、またわかっても自分の言いたいことが言葉にならず、本当に悔しく、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

この三週間の体験から、私は一年間の長期留学に挑戦することを決意しました。この三週間で膨らんだ中国への思いと、最後の日に林先生にいただいた激励を胸に、その一歩先を目指して頑張りたいと思います。



頤和園にて



クラスメイトと林承節先生を囲んで

# 平成24年度交換留学制度

交換留学とは、「二松学舎大学に交換留学に関する規程」に基づく、海外協定校への1年間の派遣留学です。本学では協定校のうち、中国 北京大学、韓国 成均館大学校、台湾 中国文化大学、オーストラリア シドニー工科大学の4校に留学できます。協定校によって派遣条件が異なります。詳細は「海外留学の手引き2013」を参照してください。

## 派遣留学生紹介 (平成24年10月～平成25年9月)

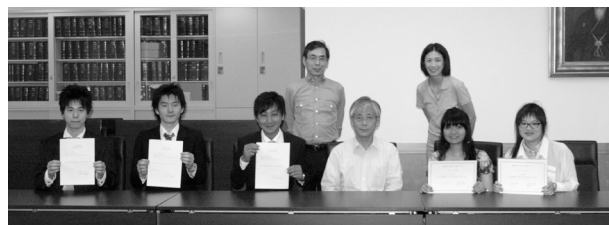
### ◆中国 北京大学

文学部中国文学科3年 北山 泰匡

文学部中国文学科3年 田坂 将洋

### ◆台湾 中国文化大学

国際政治経済学部国際政治経済学科4年 角田 陵亮



学長、副学長と派遣及び交換留学生、職員

## 交換留学生紹介 (平成24年10月～平成25年9月)

### ◆中国 北京大学



李 宇恒

### ◆台湾 中国文化大学



張 楷培



劉 雨瑄

# 国際交流センターからのお知らせ

## 国際交流センター実施行事報告 詳細は次号にて。

### 第2回TOEFL-ITP (団体割引でのTOEFL受験)

日 程 平成24年11月29日 (土) 場 所 九段キャンパス1号館608教室

今回は、平成25年6月の実施を予定しています。(4月～5月に募集予定)

結果は、本学協定校シドニー工科大学への交換留学制度に応募する際の選考対象となります。

### 第9回外国人留学生日本語スピーチコンテスト

日 程 平成24年12月8日 (土) 場 所 九段キャンパス1号館202教室

在学留学生2名、交換留学生2名の計4名が出場しました。緊張しながらも本番は落ち着いてスピーチをしてくれました。

### 国際交流年末懇親会

日 程 平成24年12月8日 (土) 場 所 九段キャンパス13階ラウンジ

今年度は、教職員、父母会役員、学生約70名が参加して大盛況でした。

編集後記	<p>◆今年度は、久しぶりに多くの新入留学生を迎えることが出来ました。二松学舎大学で学んでよかったと思えるような学生生活を送って欲しいと願っています。</p> <p>◆今年度10月に留学した派遣留学生は珍しく全員が男子学生でした。留学の楽しさ、辛さを経験して、来年の帰国時にはさらに成長した姿を見せてくれることでしょう。</p> <p>●本誌へのご意見・ご感想をお寄せください。</p> <p>E-mail : icenter1@nishogakusha-u.ac.jp</p>
------	---